人間文化論叢　第8巻　2005年

韓国有料老人ホーム居住者の友人付き合いと幸福感との関連

——地理的近接性と付き合い年数を要因として——

梁　明　玉*

Friendship and the Well Being of the Elderly on Inhabitants in Paid Home in Korea :

Form the Perspective of Geographic Distance and Association Years

YANG Myungok

abstract

A research was examined with subjects of 197 aged people inhabiting a paid home for the elderly in Seoul, Korea on elements effecting subjects friendship and wellbeing after moving into the paid home. Result shows that friendship is deeply influenced by geographic accessing possibility, association years, contact frequency. In addition, subjective well-being is related with emotional support from friends, the higher the intention of communicating with friends and relying/supporting is, the higher satisfaction is easy to acquire.

Key word : Inhabitants in Paid Home for the Aged in Korea, Friendship, Geographic Distance, Association Years, Well Being

問題と目的

親密な関係にある他者を表す語には親友（best friend）、友人（friend）、仲間（mate）があるが、いずれも選択的に構築される関係である。これらの関係を親密さによって分け、検討した研究（Bukowski & Hoza,1989; Wentzel & Caldwell,1997）がある。これらの研究での分類によれば、仲間関係にはクラスメートなどのグループにおける存在が含まれるのに対して、友人は自発的に形成された二者関係で、話しあうことが多く、互いに助け合う間柄であることが期待される仲（Davis & Todd,1985）である。友人のなかでも親友（best friend）は、信頼し秘密を打ち明けることができ、精神的な支えになる存在である（Argyle & Henderson,1985）とされている。

友人との良好な関係を維持することが、高齢者の幸福感や精神的健康に及ぼす影響（Staudinger,Marsiske,& Baltes, 1995）は、家族との関係が及ぼす影響より大きい。また、適応に良い影響（e.g., Kahn &Antonucci,1980; Lewis, 1982; Takahashi, 1990）を与える。Antonucci ら（1995）は、幸福感や精神的健康にとって友人の重要性は、友人関係が選択された任意の関係であることに由来することを示した。すなわち、家族は必須のものであるから欠如すると寂しい思いをするが、友人は任意のものであるから存在するとプラスアルファの幸せを感じるという。このように、老年期の友人の重要性が強調されているにも関わらず、友人との付き合いに関する研究はあまりな

キーワード：韓国有料老人ホーム居住者、友人付き合い、地理的近接性、付き合い年数、幸福感

＊平成11年度生　人間発達科学専攻

されていない。

老年期の友人関係に関するいくつかの研究では、友人は、年齢、性別、社会経済的地位、民族性などが一致しており（Adaims,&Blieszner,1995）、施設で生活している高齢者は、類似した特性を有する者同士が友人になりやすい（Mattews,1995）ことが示されている。また、親しい友人とは、長期的な歴史を共有しており、高齢期になっても関係が維持される（Field,1995）ことが多く、老年期になってからは、新しい友人を作ることは難しい（Lang,& Carstensen,1994）という報告がある。また、高齢者のサポートの交流については、友人は手段的サポートの提供者になりにくい傾向がある（浅川,2003）とされているが、付き合ってから、関係の重複が多いほど、共通の体験に基づく情緒的親密さを感じやすく、手段的サポートの提供者になることも多い（古谷野ら,2005）ということが示されている。友人関係が成り立つためには、同じ趣味を持っていたり、互いの価値観が似ていたりするなど、何らかの共通点や類似性を持つということが必要である。

しかし、老年期は、身体的不調、心身のエネルギーの衰退など加齢に伴う生理的な老化現状、転居など様々な環境の変化により、友人関係の内容や付き合いの形態に変化が生じはじめる（藤崎,1998）。特に、施設への入居による転居の場合、今までの付き合いが疎遠になったり、新しい付き合いを始めたりするなど、今まで通りの付き合いや友人関係が維持できなくなる。

先進国では、高齢者の新しい居住形態として、有料老人ホームへの入居を老後生活への準備として自主的に選択する傾向がある。梁（2003）の日本の有料･軽費老人ホーム入居者の友人関係に関する研究では、地理的近接性の近い老人ホーム内の友人とはサポートの授受より、趣味や遊び相手としての付き合いが多いことが示された。また、入所後の友人関係がポジティブに変わったと認識するほど、幸福感が高い傾向を示した。

未だに儒教の影響が強く、親の加齢に伴い長男家族が面倒をみるのが当たり前という意識が残っている韓国では、有料老人ホームやケアハウスなどの高齢者施設に関する理解度や知識･情報はきわめて乏しく、施設入居をタブー視している現状がある。インタビュー調査（予備調査）では、「できることなら入居だけは避けたかった。親戚や友人に恥ずかしい・・」「どうせ入るなら、知り合いがいないところがいいと家族に言った」という発言がみられた。この語りには、子どもへの不満や周りの目を気にする高齢者の複雑な心境が反映されていると推測される。近隣に友人や親戚などの知り合いがいない老人ホームを意図的に選んだ高齢者もいた。先進国のように、自主的な入居とは対照的に、子どものためという高齢者の遠慮による入居の場合、施設内外での対人関係を含め、高齢者自身の心理的な側面など様々な面で変化をもたらすことが予測される。

以上のように、韓国の高齢者と施設入居を巡る情勢を概観すると、韓国では、高齢者が家族と別居して施設へ入居することは、必ずしも社会的に認められているとは言い難い。そのことは、高齢者本人の体裁や恥の意識などにより、施設入居への姿勢にも影響を及ぼすことが考えられる。これは、施設への入居がより一般化されつつある先進国の高齢者の意識とは異なり、さらに、幸福感などを高める要因も異なるであろうと思われる。

そこで本研究では、まず、韓国有料老人ホーム入居者に対して、現在親しく付き合っている人がいるかを尋ね、その人との付き合いが、老人ホーム入居後始まったか、入居前からあったのかを尋ねる。その上で、日常的な付き合いをどのように行っているのか、付き合いに対して何を望んでいるのか、という二つの側面に対する、地理的近接性、付き合い年数、接触頻度などの影響関係を検討する。さらに、二つの側面から捉えられる友人付き合いと幸福感との関連を明らかにすることを試みる。

以下の仮説を検討することにより、韓国の施設入居高齢者の意識を把握し、彼らの幸福感を高める要因を見出すことを目的とする。

仮説

1. 施設へ入居した韓国の高齢者は、施設内に友人がいる人のほうが、友人との日常的な交流が多いだろう。これは、施設高齢者は、互いに類似した特性をもつ者同士が友人になりやすい（Mattews,1995）、日常的な接触や関心の共有は地理的に近い友人との間で多く行われる（西村ら,2000）ということから推測される。

2. 施設へ入居した韓国の高齢者は、友人との付き合いの年数が長い人ほど、また、友人との接触頻度が多い人ほど、友人との間で情緒的・手段的サポートのやりとりが多いだろう。これは、親しい友人とは、長期的な歴

史を共有しており、高齢期になっても関係が維持される（Field,1995）ことが多い。付き合ってから、関係の重複が多いほど、共通の体験に基づく情緒的親密さが強く、手段的サポートの提供者になることも多い（古谷野ら ,2005）ということから推測される。

3. 施設へ入居した韓国の高齢者は、友人間のサポートの授受、交流が頻繁にあるほど、満足感を高く感じるだろう。これは、施設入居者の友人との交流と幸福感の間で正の相関（梁 ,2003）があり、友人との支持的な出来事や、過ごす時間は幸福感と正の相関がある（Staudinger,Marsiske,& Baltes, 1995）ということからも推測される。

方法

1）予備調査

調査対象者と調査方法：ソウル周辺の有料老人ホーム入居者で、調査に協力の意志のある30名（男性15名、女性15名）に対して、調査の内容を説明し、インタビュー調査（一人当たり1～2時間程度）を行った。内容は、老人ホーム入居をきっかけに、ホーム内で新しい友人ができているのか、また、今まで付き合っていた友人との関係がどう変わっているのか、友人とは日常的にどのような付き合いをしているのかなど、友人関係の全般に関するものであった。2000年8月～9月に行った。

2）本調査

調査対象者と調査方法：ソウル周辺の有料老人ホーム（8ヵ所）の入所者197名（男性80名、女性117名）を対象とした。有料老人ホームの中から質問紙調査に協力の意志がある者を対象とし、読み上げによる質問紙調査を実施した。字が読めない方がいること、質問紙調査への回答法を知らない者がいることなどへの配慮の下、読み上げによる調査を行った。2000年11月～2001年10月に実施された。

3）調査対象者の属性（表1）：男性が80名（40.6%）, 女性が117名（59.4%）である。年齢は64歳から98歳まで分布しており、平均年齢は78.1歳であった。年齢別には、60代が12.7%、70代が41.6%で最も多く、80代が37.1%、90代以上が7.6%であった。老人ホームでの入居年数については、2年以下が42.6%で最も多く、3～4年が18.8%、5～9年が29.9%、10年以上が8.6%であった。

現在最も親しく付き合っている友人の有無について、「いる」が67.5%、「いない」が32.5%であった。いると回答した者のうち、老人ホーム内にいるのは33.0%、老人ホーム外にいるのは34.5%であった。以後の分析は、この最も親しく付き合っている特定の一人の友人との関係について行うため、「友人」は「最も親しく付き合っている友人」を指す。付き合い年数については、「付き合って1年以下」が11.4%、「2～3年」19.5%、「4～5年」12.0%、「6～9年」18.0%、「10年以上」39.1%であった。接触頻度については、「ほぼ毎日」49.6%、「週に2～3回」3.8%、「週に1回」5.3%、「月に2～3回」0.7%、「月に1回」9.8%、「年に5～6回」6.0%、「年に2～3回」4.5%、「年に1回」4.5%、「ほとんど会わない」15.8%であった。

4）質問紙の内容

(a) 友人との関係性に関する項目

1）付き合いの内容：日常的に行われている付き合いの内容を測定するため、予備調査で得た結果と既存の指標を検討し（Barrera, 1981）、韓国の高齢者の生活実態を考慮しながら内容を修正したうえ、質問項目を作成した（14項目）。付き合いの内容には、情緒的サポートの授受と手段的サポートの授受が含まれている。2）付き合いに対する希望：友人付き合いに対してどのような望みを持っているのかを測定するため、面接の内容を基に、相互的な接触願望や友人への援助願望、友人への依存願望などの質問項目を作成した（5項目）。

(b) 幸福感

ロートンが開発したP.C.Gモラールスケール（Lowton,1975）の日本語版を参考に韓国語に翻訳し、言葉を修正して17項目からなる質問項目を作成した。

(c) フェイスシート

性別、年齢、老人ホームでの居住年数、友人の居住区分（ホーム内･外）、付き合い年数、接触頻度などを尋ねた。なお、友人との関係性に関する質問項目と幸福感に関する質問項目のすべては、5件法で尋ねた。

表1. 調査対象者の基本属性

項目	対象者 197 名			
性別	男性 80 名	40.6%		
	女性 117 名	59.4%		
年齢	64 － 69 歳 25 名	12.7%		
	70 － 79 歳 82 名	41.6.%		
	80 － 89 歳 85 名	37.1%		
	90 歳以上 15 名	7.6%		
友人年数	1 年以下 15 名	11.4%		
	2 － 3 年 63 名	19.5%		
	4 － 5 年 69 名	12.0%		
	6 － 9 年 69 名	18.0%		
	10 年以上 18 名	39.1%		
近接性	ホーム内 65 名	33.0%		
	ホーム外 68 名	34.5%		
	友人無し 64 名	32.5%		
接触頻度	ほぼ毎日 66 名	49.6%	週 2 － 3 回 5 名	3.8%
	週 1 回 7 名	5.3%	月 2 － 3 回 1 名	0.7%
	月 1 回 13 名	9.8%	年に 5 － 6 回 8 名	6.0%
	年に 2 － 3 回 6 名	4.5%	年に 1 回 6 名	4.5%
	ほとんど会わない 21 名	15.8%		

結果・考察

1. 基礎的統計

まず、友人との付き合いの内容について、対象者から友人にやってあげるという提供に関する項目（7項目）と友人からやってもらうという受領に関する項目（7項目）を分け、それぞれ主因子法、バリマックス回転による因子分析を行った。分析結果、最終的に、提供について6項目、受領について7項目を採択し、それぞれ2因子が抽出された（表2)。

提供の第1因子は、友人に精神的サポートを与える項目から成り、「情緒的サポートの提供」、第2因子は、友人に行為としてサポートを与える項目から構成されているため、「手段的サポートの提供」と命名した。受領の第1因子は、友人から精神的サポートを受ける項目で構成されていることから、「情緒的サポートの受領」、第2因子は、友人から行為によるサポートを受ける項目から構成され、「手段的サポートの受領」と命名した。

付き合いの希望に関する5項目について因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行った結果、2因子が得られた（表3)。第1因子は、友人と互いに会って欲しいという内容の項目が含まれることから、「交流願望」、第2因子は、友人に何かやってもらいたい、やってあげたいという内容の項目が含まれているため、「援助･依存願望」と命名した。

幸福感に関する尺度17項目に対して同様の分析を行った結果、3因子が得られた。共通性が極端に低い項目や解釈性を考慮し､5項目を除外して再び因子分析を行い､最終的に12項目を採択した。第1因子は､「心理的不安」､第2因子は、「老化についての孤独感」、第3因子は「老化についての満足感」と命名した。以上の結果について、

各因子を構成する項目の値を単純加算平均して合成変数を作成した。α係数については因子分析結果（表2,3）に示す。

表2. 友人付き合い内容のサポートの授受の因子分析結果

項目（提供）	因子1	因子2	共通性
元気づけてあげる	.870	.260	.825
気を落とした時話相手や相談に乗ってあげる	.765	.412	.755
心配事や悩み事を聞いてあげる	.699	.273	.564
お互いのところに遊びに行く	.231	.797	.688
数日間寝込んだ時看病や世話をしてあげる	.381	.778	.751
病気の時見舞いに行ってあげる	.344	.738	.663
寄与率(%)	32.500	31.391	
累積率(%)	32.500	63.891	
α係数	0.87	0.87	
項目（受領）	因子1	因子2	共通性
数日間寝込んだ時看病や世話をしてくれる	.825	.267	.752
お互いのところに遊びに来る	.793	.305	.722
病気の時見舞いに来てくれる	.699	.371	.626
お金が必要になった時貸してくれる	.446	. 240	.256
元気づけてくれる	.293	.886	.871
気を落とした時話相手や相談に乗ってくれる	.449	.716	.715
心配事や悩み事を聞いてくれる	.292	.706	.583
寄与率(%)	33.853	30.801	
累積率(%)	33.853	64.654	
α係数	0.83	0.87	

注：提供と受領の項目を分けてそれぞれに因子分析を行った結果，採択された項目である。

表3. 友人付き合いの希望に関する因子分析結果

項目	因子1	因子2	共通性
もっと行き来したい	.926	.304	.949
趣味や遊びを一緒にしたい	.616	.440	.573
面倒を見てあげたい	.296	.897	.892
相手に役に立ちたい	.491	.676	.698
相談にのってもらいたい	.508	.552	.562
寄与率(%)	33.791	33.599	
累積率(%)	33.791	67.390	
α係数	0.83	0.85	

2. 友人付き合いに及ぼす影響要因

家族や住み慣れた環境から離れて老人ホームで生活する高齢者の対人関係、特に親しい友人との付き合いには、友人がどこに住んでいるのか、どのくらい会っているのか、付き合ってどのくらい経っているのかなど、地理的近接性と接触頻度、付き合い年数などの要因が影響していることが予想される。そこで、友人付き合いに対する要因の影響を調べるため、友人付き合いに関する尺度を従属変数、地理的近接性、接触頻度、付き合った年数などを独立変数として分散分析を行った（表4）。

表4. 各群別にみた友人付き合いに関する尺度の平均値（SD）と分散分析の結果

尺度	情緒的サポート		手段的サポート		希望	
主効果	提供	受領	提供	受領	交流	依存
ホーム内群 (n=65)	3.72(.85)	3.71(.79	3.71(.95)	3.35(.93)	3.52(.69)	3.27(1.18)
ホーム外群 (n=68)	3.14(1.21)	3.23(1.17)	2.54(1.22)	2.43(1.10)	3.83(.76)	3.41(.89)
F 値	9.99**	7.62**	37.70***	26.68***	5.61**	12.63***
多重比較（Tukey 法）	内群 > 外群	内群＞外群	内群＞外群	内群＞外群	内群 > 外群	内群 > 外群
接触頻度多群 (n=66)	3.73(.84)	3.73(.78)	3.74(.94)	3.37(.93)	3.50(.68)	3.82(.76)
接触頻度中群 (n=26)	3.51(.86)	3.41(.92)	3.15(.94)	2.98(.81)	3.47(.81)	3.58（.60)
接触頻度少群 (n=41)	2.88(1.34)	3.08(1.30)	2.09(1.16)	2.04(1.10)	3.02(1.07)	3.30(1.04)
F 値	8.68***	5.27**	33.03***	23.75***	4.31*	4.97**
多重比較（Tukey 法）	多･中＞少	多＞少	多＞中＞少	多･中＞少	多＞少	多＞少
友人年数短群（n=41）	3.73(.82)	3.73(.77)	3.66(.86)	3.25(.93)	3.54(.71)	3.86(.79)
友人年数中群（n=40）	3.65(.96)	3.63(1.00)	3.58(1.20)	3.31(1.05)	3.43(.85)	3.61（.85)
友人年数長群（n=52）	3.00(1.22)	3.14(1.15)	2.33(1.12)	2.26(1.04)	3.12(.95)	3.41(.87)
F 値	7.11**	4.70*	22.95***	15.91***	2.98	3.30*
多重比較（Tukey 法）	短・中＞長	短＞長	短・中＞長	短・中＞長	ns	短＞長

注：$^{*}p<.05$, $^{**}p<.01$, $^{***}p<.001$

①地理的近接性の影響；友人の地理的近接性については、友人が老人ホーム内にいる群、老人ホーム外にいる群として2群に分け、友人付き合いに関する尺度得点の平均値に違いが見られるかどうかを検討した。分析の結果、友人付き合いの内容として、情緒的サポートの授受（提供 F（1,131）=9.99,$p<.01$; 受領 F（1,131）=7.62,$p<.01$）、手段的サポートの授受（提供 F（1,131）=37.70,$p<.001$; 受領 F（1,131）=26.68,$p<.001$）、交流願望（F（1,131）=5.61,$p<.01$）、援助･依存願望（F（1,131）=12.63,$p<.001$）などにおいて群の主効果が有意であった。情緒的サポートの授受と手段的サポートの授受、交流願望と援助･依存願望について、地理的近接性が近い老人ホーム内に友人がいる群の平均値が有意に高かった。この結果から、親しく付き合っている友人が老人ホーム内にいる群のほうが、友人との間に情緒的、手段的サポートを与えたり、受けたりすることが多く、友人に対してもっと一緒に交流したり、援助・依存したいという気持ちが強いことが示された。

この結果は、友人との間には手段的サポートの授受はほとんどなく（矢部ら ,2002)、手段的サポートの提供は家族や親族に限定される傾向（西村 ,2000; 浅川 ,2003）を示した知見とは異なるものである。家族と離れて施設に居住する高齢者は、在宅高齢者とはサポートの意味合いが異なるのかもしれない。予備調査では「施設に入ることだけはできることなら避けたかった。近所や友人に恥ずかしい・・・」という発言がみられた。この語りには、子どもへの不満と他人の目を気にする高齢者の複雑な心境が反映されていると推測される。だからこそ同じ境遇にある老人ホーム内の友人とは、家族に限定されていた手段的サポートを助け合う形で積極的に行っており、子どもに依存したいが出来ない状況が友人に向けられ、互いに援助・依存したい気持ちが強くなるのではないだろうか。

②接触頻度の影響；友人と会う頻度については、「ほぼ毎日」を接触頻度多群、「週に2～3回くらい」、「週に1回くらい」、「月に2～3回くらい」、「月に1回くらい」を接触頻度中群、「年に5～6回くらい」、「年に2～3回くらい」、「年に1回くらい」、「ほとんど会わない」を接触頻度少群として3群にわけ、友人付き合いについて、一元分散分析を行った。その結果、友人との情緒的サポートの授受（提供 F（2,130）=8.68,$p<.001$; 受領 F（2,130）=5.272,$p<.01$）、手段的サポートの授受（提供 F（2,130）=33.03,$p<.001$; 受領 F（2,130）=23.75,$p<.001$）と、友人との交流希望（F（2,130）=4.31,$p<.05$）、援助・依存願望（F（2,130）=4.97,$p<.01$）などにおいて群の主効果が有意であった。

多重比較（Tukey法）によると、友人への情緒的サポートの提供については、接触頻度多群と少群、中群と少群の間で平均値の差がみられ、接触頻度多群・中群のほうが少群よりも、友人への情緒的サポートを与えることが多いことが示された。友人からの情緒的サポートの受領については、接触頻度多群と少群の間のみ平均値の差が見られ、接触頻度多群のほうが少群よりも、友人から情緒的サポートをもらうことも多いことが示された。友人への手段的サポートの提供については、接触頻度多群と中群、多群と少群、中群と少群の間で平均値の差がみられた。

すなわち、接触頻度多群は友人への手段的サポートを最も提供しており、また、接触頻度中群のほうが少群よりも、友人への手段的サポートを与えていることが示された。友人からの手段的サポートの受領については、接触頻度多群と少群、中群と少群の間で平均値の差がみられ、接触頻度多群・中群のほうが少群よりも、友人から手段的サポートを受けることが多いことが示された。友人との交流願望と援助・依存願望については、接触頻度多群と少群の間のみで平均値の差がみられた。すなわち、接触頻度多群のほうが少群よりも、友人との交流や援助・依存したい願望が強いという結果が示された。

施設高齢者は、互いに類似した特性をもつ者同士が友人になりやすい（Mattews,1995）、日常的な接触や関心の共有は家族より地理的に近い友人が選択されることが多い（西村ら,2000）ということが示されていたように、子どもに依存したいができない状況、友人や家族とは離れて生活しているという共通点が親しく付き合うきっかけとなり、頻繁に会う要因に繋がり、友人との付き合いの活発性を引き起こしているのかもしれない。

③付き合い年数の影響;付き合って「1年以下～3年くらい」を付き合い短群、「4年～9年くらい」を付き合い中群、「10年以上」を付き合い長群として3群にわけ、友人付き合いに関する尺度得点について、一元分散分析を行った。その結果、友人との情緒的サポートの授受（提供F（2,130）=7.11,p<.01;受領F（2,130）=4.70p<.05）、手段的サポートの授受（提供F（2,130）=22.95,p<.001;受領F（2,130）=15.91,p<.001）と、友人への援助・依存願望（F（2,130）=3.30,p<.05）などで主効果が有意であった。

多重比較（Tukey法）を用いて検討したところ、友人への情緒的サポートの提供については、付き合い短群と長群、中群と長群の間で平均値の差がみられ、付き合い短群と中群のほうが長群よりも、友人に情緒的サポートを与えることが多いことが示された。友人からの情緒的サポートの受領については、付き合い短群と長群の間のみ平均値の差がみられ、付き合い短群のほうが長群よりも、友人から情緒的サポートを受けることが多いという結果が示された。友人との手段的サポートの授受については、提供、受領のいずれも付き合い短群と長群、中群と長群の間で平均値の差がみられた。すなわち、付き合い短群と中群のほうが長群よりも、友人との間で手段的サポートのやりとりが多いことが示された。友人との援助・依存願望については、付き合い短群と長群の間のみ平均値の差がみられ、付き合い短群のほうが長群よりも、友人に援助したい、依存したい気持ちが強いという結果が得られた。

これらの結果は、親しい友人とは、長期的な歴史を共有しており、高齢期になっても関係が維持される（Field,1995）ことが多く、老年期になってからは、新しい友人を作ることは難しい（Lang,& Carstensen,1994）という知見とは一部異なるものである。韓国の高齢者は、回りの目を気にし、今まで親しく付き合っていた友人との関係を絶ってしまうほど、施設への入居自体に強い抵抗感を示していた。施設の方へのインタビューから、「入ってから一ヶ月位は部屋にじっと引きこもる方が多いです。他の人とも口もきかない、一日中ボーッとしていますよ」「家族があまり来なくなると、食事の時、次第に隣同士で子どもの話や個人的な話をするようになり、互いの部屋を行ったり来たりしながら、親しくなります」という話が得られた。この語りからは、自主的な、準備された入居ではなく、やむを得ず入居したため、家族に対する複雑な心境が、引きこもりを引き起こす要因になったかもしれない。付き合い年数が短い人は、家族への寂しい思いを友人に向けることにより、より積極的に友人とサポートのやりとりを行い、互いに交流したいという思いを強くさせるかもしれない。

3. 友人付き合いと幸福感との関連

調査対象者の友人付き合いと幸福感との関連を調べるため、これらの両尺度間のピアソンの相関係数を求めた（表5）。

表5. 友人付き合いに関する尺度と幸福感に関する尺度との間の相関係数

尺度	老化についての孤独感	心理的不安	老化についての満足感
情緒的サポートの提供	-0.08	0.07	0.26**
情緒的サポートの受領	-0.06	0.05	0.30***
手段的サポートの提供	-0.17*	-0.11	0.40***
手段的サポートの受領	-0.19**	-0.07	0.37***
友人との交流願望	-0.07	-0.06	0.34***
友人への援助・依存願望	-0.01	-0.07	0.41***

注：*p<.05 、**p<.01、***p<.001

その結果、「友人への情緒的サポートの提供」「友人からの情緒的サポートの受領」は、幸福感に関する尺度のうち、「老化についての満足感」との間のみ有意な正の相関がみられた。「友人への手段的サポートの提供」「友人からの手段的サポートの受領」は、幸福感に関する尺度のうち、「老化についての孤独感」との間で負の相関、「老化についての満足感」と間で正の相関がみられた。これは、友人と情緒的サポートや手段的サポートを与えたり、受けたりすることが多いほど、老化についての満足感が高いという傾向を示し、また、友人との間に手段的サポートのやりとりが多いほど、老化についての孤独感が低いという傾向を示す結果である。この結果は、友人との支持的関係は、高齢者の幸福感と正の相関があるとしたStaudingerら（1995）の知見と一致している。

また、友人付き合いに関する「交流願望」と「援助･依存願望」は、「老化についての満足感」との間のみ有意な正の相関がみられ、友人との間にもっと行き来したいという願望が強いほど、また友人に援助してあげたい、依存したいという希望が強いほど、老化についての満足感が高い傾向を示すという結果が得られた。

総合的考察

韓国の有料老人ホーム居住者の友人との付き合いには、地理的近接性、接触頻度、付き合った年数などが深く影響していることが明らかになった。さらに、友人付き合いのもちかたによって幸福感が異なることが示された。まず、友人付き合いへの影響要因について、友人が地理的に近い同じ老人ホーム内にいること、接触頻度が多いこと、付き合い年数が短いことが、友人間の情緒的･手段的サポートのやりとりの多さ、友人への交流願望や援助･依存願望の強さと関連するという結果が見出された。予備調査によれば、「できることなら入居だけは避けたかった。友人や親戚にはずかしい・・・」「どこでもいいから知り合いのいないところがよかった」という発言から、韓国の有料老人ホーム入居者の施設入居への強い拒否感が示されている。その背景には、親が年をとると子どもが面倒を見るのが当然視されること、新しい居住形態である有料老人ホームの存在があまり知られていないこと、それゆえ、「老人ホームは家族に見捨てられた人たちがいくところ」という暗いイメージが影響していると思われる。

だからこそ、施設にいる高齢者は、家族に対する寂しい思いや慣れない環境への転居という同じ境遇にある施設内の友人に、より親密さを感じるのではないだろうか。また、「家族とはあまり会えないから、何かあったら互いに慰めたり、病気のときはお粥を作って部屋にもっていたりする」という語りからは、地理的に近い利点もあり、よく会うことにより趣味や遊びを共に楽しむだけではなく、悩みや相談事などの精神的な面を含めて、手伝いするなど助け合うことが推測される。施設へ入居した韓国の高齢者は、同じ境遇にある施設内の友人と交流が多いだろうという仮説1が支持されたと考えられる。

手段的サポートの授受は家族や親族に限定されており、友人とはあまり行われてない（浅川 ,2003; 矢部ら ,2002）といわれているが、家族と離れて生活している施設の高齢者は、よく会うことにより、互いに共通の体験に基づく情緒的親密さを感じ、家族・親族に限定されていた手段的サポートもよく行われるようになったのかもしれない。施設入居高齢者にとって、友人という存在は家族以上の意味合いを持つのかもしれない。

高齢者を取り巻く重要な他者の中には、生涯にわたって関係が維持される人もいれば、ほんのひと時の付き合

いで終わる人もいる。親しい友人とは長い歴史を共有し、高齢期になってもその関係が維持される（Field,1995）ように、付き合いの長さが強調されているが、韓国の有料老人ホーム入居者は、友人との付き合いの年数が短いほど、手段的・情緒的サポートのやりとりが多く、より会いたい、援助したい、依存したいという気持ちが強いという本研究の結果は、友人との付き合い年数が長い人ほど、また、友人との接触頻度が多い人ほど、友人との間で情緒的・手段的サポートの授受が多いだろうという仮説２の一部を支持しなかった。

この結果は、施設の転居というライフイベントにより、今までの付き合いが維持できなくなった高齢者は、新しい人間関係を築くため、サポートを与えたり、受けたりするなど付き合いに積極的になることが推測される。施設への転居、親しい友人の死亡や病気など、環境により付き合いが変わりやすい高齢期は、付き合いの年数の長さより、ほんのひと時の付き合いであっても、精神的な支えになる存在であるような親密さの強さが重要であるのではないだろうか。付き合いが長くあれ、短くあれ、高齢者が付き合っている友人は、生涯に出会った他者のうちのごく一部が、何らかの基準によって選択された重要な他者であることにはちがいないだろう。

つぎに、友人付き合いと幸福感との関連については、友人との情緒的・手段的サポートの授受が多いほど、孤独感が低く、幸福感が高い傾向が、また、友人との交流、援助・依存願望が強いほど、幸福感が高い傾向が示された。友人付き合いのすべての変数は、幸福感との間の強い相関を示している。この結果は、Antonucci ら（1995）が示したように、家族は必須のものであるから欠如すると寂しい思いをするが、友人は任意のものであるから存在するとプラスアルファの幸せを感じるという知見を裏付けると同時に友人間のサポートの授受，交流が多いほど、満足感を高く感じるだろうという仮説３が支持されたといえる。韓国の有料老人ホーム入居者は、施設への入居に対する家族への不満や寂しい思いとは裏腹に、同じ状況にある友人との関係に対してより幸せを感じるのではないだろうか。

今後の課題

今回は韓国の有料老人ホーム居住者のうち、友人がいる人に限定して友人付き合いと幸福感との関連を検討したが、今後は、友人がいない人や子どもがいない人も含めたより詳細な検討が必要であるだろう。なお、本研究では、新たな視点を取り入れるため、友人付き合いの希望に関する尺度を作成したが、その妥当性の裏づけが十分であるとはいえない。今後、より多くの対象者に本尺度を適用し、その妥当性を検討する必要があるだろう。

引用文献

Adaims,R.G.,& Blieszner,R.（1995）. Midlife friendship patterns. In N. Vanzetti & S.Duck（Eds.）*A lifetime of relationships*（336-363）. SanFrancisco.:Books/Cole.

Antonucci,TC, Akiyama,H.（1995）. Convoys of social relations; Family and friendships within a life span context. In Bliezner R, Bedford VH（eds.）: *Handbook of Aging and Family*, 355-371, Greenwood, Westport.

Argyle,M.& Henderson,M.（1985）.The anatomy of relationships. Lodon:Methuen.

浅川達人．（2003）. 近隣と友人.（古谷野亘、安藤孝敏編）新社会老年学；シニアライフのゆくえ ,133 － 139, ワールドプランニング；東京

Barrera, M. Jr.（1981）. Prelimminary development of a scale of social support:Studies on college students.American *Journal of Community* Psychology, 9, 435-447 .

Bukowski, W.& Hoza, B.(1989).Popularity and friendship: Issues in theory, measurement, and outcome.In T.J.Berndt& G.W.Ladd(Eds.), *Peer relationships in child development*. New York: Wiley.

Davis,K.E.,&Todd,M.（1985）.Assessing friendships: Prototypes paradigm cases, and relationship. In S.W.Duck & D.Perlman（Eds.）, *Understanding personal relationships*.Lodon:Sage.

Field,D.（1995）. Continuity and change in friendship in advanced old age: Findings from the Berkeley Older Generation Study. Paper presented at the 7th European Conference on Developmental Psychology, Krakow, Poland.

藤崎宏子．（1998）. 高齢者・家族・社会的ネットワーク．培風館；東京．

Kahn,RL,& Antonucci,TC.（1980）. Convoy over the life course; Attachment, roles, and social support. *Life Span Development and Behavior*,13,253-286.

古谷野亘・西村昌記・矢部拓也ほか．(2005). 関係の重複が他者との交流に及ぼす影響；都市男性高齢者の社会関係．*老年社会科学* ,27,17-23.

Lang,F.R., & Carstensen,L.L. (1994). Close emotional relationships in late life: Further support for proactive aging in the social domain. *Psychology and Aging*.9, (315-324).

Lewis,M. (1982). The social network systems model: Toward a theory of social development. In T. M. Field, A. Huston, H. C. Quary, L. Troll& G.E.Finley (Eds.), *Review of human development*. New York: Wiley. 180-214.

Lawton, M.P. (1983). Environment and other determinants of well-being in older people.
The Gerontologist, 23, 349-357.

Matthews,S.H. (1995). Friendship in old age. In N.Vanzetti & S.Duck (Eds.), *A lifetime of relationships*. (406-430). SanFrancisco: Brooks/Cole.

西村昌記・石橋智昭・山田ゆかりほか．(2000). 高齢期における親しい関係；「交遊」「相談」「信頼」の対象として他者の選択．*老年社会科学* ,22,367-374.

Staudinger,U.M.,Marsiske,M.,& Baltes,P.B (1995). Resilience and reserve capacity in late adulthood:Potentials and limits of development across the life span. In D.Cicchetti&D.J.Cohen (Eds.), *Developmental psychopathology*.Vol.2. (801-847).

Takahashi,K. (1990). Affective relationships and their lifelong development.
In P. M. Lerner (Eds.), *Life-span development and behavior*.Vol.10. (1-27).

Wentzel, K.R.,& Caldwell,K. (1997). Friendships peer acceptance, And group membership:
Relations to academic achievement in middle school. *Child* Development,68,1198-1209.

矢部拓也・西村昌記・浅川達人ほか．(2002). 都市男性高齢者における社会関係の形成；「知り合ったきっかけ」と「その後の経過」．*老年社会科学* ,24,319-326.

梁明玉．(2003). 高齢者の友人関係と幸福感；有料・軽費老人ホーム入所者を中心に．お茶の水女子大学**人間文化論叢** 5,263-272.

付記

本稿は、2001 年度富士ゼロックス小林節太郎助成基金による調査の一部である。

(2006 年 1 月 10 日受理)